



しーず君

しーず君の研究室訪問 (第3回)

大学発 シーズ紹介

黒毛和牛の“適度な脂肪”と“赤身の旨み”を日本の牧草で作り返す ~ Q ビーフ ~

九州大学大学院 農学研究院 後藤貴文 准教授
(農学部附属農場・高原農業実験実習場)



和牛と言っても、それを育てるために使用している飼料の90%以上は輸入物。そこで私たちは、和牛の特性である脂肪蓄積能力と赤身肉の旨みを追求した、日本の牧草で、安全・安心でおいしい牛肉の生産を目指しています。この生産システムには“代謝生理的インプリンティング欠刷り込み”という新しい概念を取り入れ、子牛期に草からの栄養吸収能力を高め、出荷までの後半期においても日本の草を主食に放牧肥育しながら、美味しい和牛を作ることに取り組んでいます。



「くじゅう牧場での研究はいかがですか？」

先生 とても自然が多く、また牛たちもいて、癒されています。くじゅうは年間200 500万人の観光客がいらっしゃいます。そこに住んでいるので、移動の手間が掛かりません(笑)。



「どのような研究ですか？」

先生 この研究は、現在の肉牛肥育とは逆転の発想です。従来の肥育方法では、どちらかと言えば子牛期(生後10ヵ月まで)に、「粗飼料」と言われる稲藁や草中心の飼料を与え、その後出荷まで濃厚飼料(この大半が輸入)を多給し、仕上げます。一方、私の研究は、子牛期にミルクや濃厚飼料できれば国産)を多給し、肥満体質を刷り込み(代謝生理的インプリンティング効果) 栄養吸収能力を高め、出荷までの後半期には牧草からでも栄養分をしっかりと吸収し、適度な脂肪をもつ牛に肥育するわけです。即ち牛舎で肥育する「プロイラー型」ではなく、放牧方式の「地鶏型」肥育であり、いかに子牛の時に肥満体質を作るかがポイントです。

子牛期なので、この飼料の消費量を抑えることができ、コスト削減にも結びつきます。また、牛から出る排泄物(糞尿)も牧草の堆肥として有効に循環活用することができます。まさに“循環型の肉牛生産”です。

元来、牛は人が消化できない粗い繊維質(通常の単胃動物では消化できない繊維性の高い植物多糖資源)を分解し、草資源からタンパク質源としての食肉やミルクを生産し、それを人に供給するという重要な物質循環機能を担った草食動物です。

私たちは、耕作放棄地の増加問題を抱える国内の未利用草資源をフル活用して、“おいしい赤身肉”と、その中に“多くのビタミンや機能性物質を含んだ脂肪”が適度に交雑された安全・安心な新しいタイプのブランドビーフ(Qビーフ)の開発に取り組んでいます。



「畜産関係の皆さんへ一言お願いします！」

先生 現在、畜産、特に牛の肥育を営まれている皆さんは飼料の高騰や、糞尿の効率的な再利用など苦労されていると思います。今後、穀物相場の影響や糞尿の再利用問題に効果的な「日本の草を使った新しい畜産業の構築」を目指して行きたいと思っています。何か皆さんのお役に立てばと思います。

《お問合せ先》

(株)FFGビジネスコンサルティング
担当：今泉 TEL092-723-2244 FAX092-713-6486



「どのような効果が期待できますか？」

先生 この研究による肥育手法を用いることで、多くを輸入に依存する濃厚飼料を食べる時期が、

